トルコ語のアクセントについて

福　盛　貴　弘
大東文化大学

【要旨】トルコ語のアクセントに関するこれまでの議論は，強さアクセントであることを前提にして，最終音節にストレスがない例外アクセントにおいてストレスの位置がどこにあるのかを指定することを模索するというのが主流であった。本稿では，強さアクセントではなく，高さアクセントであることを前提にして，どこに下がり目が指定されるかを考察している。その結果，下がり目がなければ基本アクセント，下がり目があれば例外アクセントとし，例外アクセントには主に 2 種のタイプがあることを提示した。例外アクセント A はその前に下がり目があればその前の下がり目を優先するタイプで，例外アクセント B はその下がり目が最優先されるタイプである。また，例外アクセントには，意味カテゴリー表示機能によって，初頭音節の直後に下がり目があるタイプがあることも提示した*。

キーワード：トルコ語，アクセント，高さアクセント，下がり目，ストレス

1. 序

1.1. これまでの研究

トルコ語[1] のアクセントについては，これまで多くの議論があった。古くは Kúnos（1905）におけるストレスが語の第 1 音節に，ピッチが語の最終音節に，という指摘があり，Lewis（1953）にも同様の指摘がある。服部（1973: 6）では，

> その全体が，「末尾音節に核のあるアクセント素」を有することが明らかとなる。第 1 音節の強勢はアクセント素の頭を示す役割を演じているもので，この第 1 音節が時々やや高く発音されるのもそれに役立つのである。

Csató and Johanson（1998: 207）では，

> Pitch accent is normally on the last syllable of native lexical stems and expanded forms

* 本稿を執筆するにあたり，査読者の 2 名をはじめとし，指導教官であった城生佰太郎氏，東ユーラシア言語研究会（2009 年 1 月 31 日, 青山学院大学）での口頭発表における早田輝洋氏，林徹氏，ジョン・ホイットマン氏など，様々な方から有益なコメントをいただいた。これまでの研究で被調査者となった Deniz Bökesoy 氏，Engin Yazıcıoğlu 氏には，調査にご協力いただいた。辞典における例外アクセントの調査については，今吉一帆氏，大澤由香里氏，金文淑氏，小林美穂氏，砂原康平氏，吉田由貴氏，米山久美氏にご協力いただいた。また，多くの先輩・同輩・後輩とも様々な議論を重ねた。この場を借りて全ての方に感謝の意を表する。

[1] 本稿で用いるトルコ語は，トルコ共和国で話されているイスタンブル方言を基にした共通語を指す。表記と音の対応で注記すべき点は，ç[tʃ], c[dʒ], ı[ɯ], j[ʒ], ö[ø], ş[ʃ], ü[y] である。ğ は前の母音を長音化するか無音化するかのどちらかである。

of them containing accentable suffixes, ~ The distribution of dynamic stress, marked with ´ in front of the syllable, is less predictable. It often falls on the first syllable, in particular if the latter is heavy (closed or with a long vowel), but can also move to other syllables.

と記されている。Kúnos（1905）における初期段階でのピッチの指摘は評価できる。トルコ語のアクセントにおけるピッチ（あるいはトーン）の役割については，Radloff（1882），Horten（1916），Raquette（1927），Collinder（1939），Benzing（1941），柴田（1948），Kononov（1956），Lewis（1967），竹内（1970），Underhill（1976, 1986），Konrot（1981, 1987, 1991），林（1989），Krámský（1990），Demircan（1996），Kornfilt（1997），福盛（2002, 2004, 2007），Levi（2005）など多くの研究者に指摘されている。一方，第 1 音節のストレスについては 2.1 節で後述するように誤りであることが指摘され，最終音節にストレスがあるのが基本アクセントであるという見解が主流となっている。

トルコ語が無アクセントだという見解については，Grønbech（1940），Kreider（1954）が代表的である。前者は音声学的特徴がないという点で，後者は最終音節にストレスがあることは指摘しているが音韻論的にアクセントが有意な価値を持たないという点で，無アクセントだという見解に至っている。確かに，大多数が基本アクセントであるという点は，以下の計測結果から確認できる。竹内（1996）[2] は見出し語が約 22,500 語掲載されている中辞典である。このうち，例外アクセント表記が付記されている語を数えたところ，1,681 語（約 7.4%）確認できた[3]。また，一部の語において以下のようにアクセントによる最小対がみられる。

(1)	mısír	とうもろこし	Mísır	エジプト
	sirkecí	酢を売る人	Sírkeci	シルケジ（イスタンブルの地名）
	bebék	赤ちゃん	Bébek	ベベキ（ボスポラスにある地名）
	ordú	軍隊	Órdu	オルドゥ（黒海近辺の都市名）
			（Lewis 1967: 22，ストレスを ´ で示す。）	
(2)	ak**şam**	夜（名詞）	**ak**şam	夜に（副詞）
	öy**le**	そんな（形容詞）	**öy**le	そんなに（副詞）
	şüphe**siz**	疑いのない（形容詞）	**şüp**hesiz	疑いなく（副詞）
			（Demircan 1996: 143，ストレスのある音節を太字で示す。）	

[2] TDK（2005）の Türkçe Sözlük は，見出し語がもっと多いという点で計測すべき辞典であるが，この辞典には国名，地名がほとんど掲載されていないという点で，例外アクセントをとらえるには偏りがあると判断し，今回は計測の対象としなかった。

[3] 今回は例外アクセントの表記がついているもののみ対象にした。派生語，複合語，品詞の違いによるアクセントの違いなどで例外アクセント表記がついていない語もあったが，それらは含めなかった。精査してそれらを加えたとしても 10% 強であると予測できる。表記もれについては，TDK（2005）も同様の傾向がある。

以上の事実をふまえると，確かに割合は低いという点で大枠としてトルコ語は無アクセントであるという言い方もできるが，例外アクセントも弁別的対立も少なからず存在するという点から無アクセントと断定すべきでないと考えられる。

では，トルコ語のアクセントについて現状ではどのようにとらえられているのだろうか。先述したピッチの役割の指摘をしたものに加え，Appenzeller（1948），Jansky（1954），Lees（1961），Swift（1963），Foster（1969），Zimmer（1970），Demircan（1975, 1976a,b），Dobrovolsky（1976），Özkaragöz（1981），Sezer（1981），Sebüktekin（1984）, Inkelas and Orgun（1998）, Inkelas（1999）, Kabak and Vogel（2001）などにおいて，トルコ語では語の最終音節にストレスがあるのが基本アクセント，それ以外の音節にストレスがあるのが例外アクセントであるという説を示している。よって，トルコ語のアクセント研究は，最終音節にストレスがあるか否かを前提にして例外アクセントにおけるストレスの位置をどのようにとらえるかが研究の主流となっている。

1.2. 例外アクセントの扱い

1.2.1. 語幹におけるアクセント

語幹において，基本アクセントと例外アクセントに大別される。語幹において，例外アクセントとなる語には以下のような語があげられる[4]。

(3)　外来語：pusúla（羅針盤＜イタリア語），mukávva（ボール紙＜アラビア語），rádyo（ラジオ＜フランス語）など
副詞：şímdi（今），sónra（後で），gérçekten（本当に）など
地名名詞：Ánkara（アンカラ），İstánbul（イスタンブル）など
親族名詞：ánne（母），ábla（姉），téyze（おば），ámca（おじ）など
感動詞：háydi（さあ），péki（よし），yúha（ひっこめ）など
疑問詞：nére（どこ），hángi（どの，どんな），násıl（どんな）など
場所代名詞：búra（ここ），şúra（そこ），óra（あそこ）

竹内（1996）に示された例外アクセントは 1,681 語であったが，うち 1,148 語が外来語（内訳としては，イタリア語 318，アラビア語 229，フランス語 157，ギリシア語 125，ペルシア語 71，英語 36 が多数を占める[5]）であった。また，残りの 533 語のうち目立つものとして，副詞 144，地名名詞 111，強調形容詞 64，感動詞 18，親族名詞 14，疑問詞 9 があげられる[6]。

---

[4] 以降，ストレス説の説明の場合は，母音の上に ´ をつけてストレスの位置を示す。
[5] 竹内（1996）の外来語表記は TDK（1988）に依拠している。ここでは, TDK（2005）も調べ，補足している。なお，複数の言語が示されている語（ドイツ語とフランス語が併記されている blóknot（付箋）など），複数の言語で語形成されている語（フランス語語幹とトルコ語接辞で形成された líse-li（高校生）など）はここでは除外して数値を示している。
[6] 強調形容詞は形容詞としてもカウントしており，疑問詞は名詞・形容詞・副詞と重複するため，単純加算の内訳ではない。強調形容詞については，3.6. 節参照。なお，複数の品詞表記

ストレスの位置については，後から 2 番目の音節 1,167，後から 3 番目の音節 380，後から 4 番目の音節 113 となっており，後から 2 番目の音節が例外アクセントの基本パタンとなることが分かる。Demircan（1980）では，トルコ語の潜在アクセントを検証するため，無意味語をトルコ人話者に読ませてストレスの位置を記した結果，後から 2 番目の位置にストレスがあるのが一般的だという結論にいたっている[7]。

例外アクセント語幹におけるストレスの位置に対する見解として Sezer（1981）があげられ，ストレスの位置は音節構造によって予測できるとされている。Sezer（1981）では，以下のような規則を立てて，例外アクセントにおけるストレスの位置が予測できるものとして捉えている。

（4）　strong word：後から 2 番目および／あるいは後から 3 番目の音節が重音節の語。weak word：後から 2 番目と 3 番目の音節が軽音節の語。

（5）　weak NFS (non-final stress) word に対する例外アクセント規則：weak NFS word は後から 2 番目の音節にストレスがある。

（6）　strong NFS word に対する例外アクセント規則：後から 2 番目の音節が重音節であればそこにストレスが，軽音節であれば後から 3 番目の音節にストレスがある。

（4）～（6）で構成される規則で，大多数の例外アクセントにおけるストレスの位置が予測できる。（3）に示した語のほとんどは，基本的にこの規則で説明がつく[8]。また，強調形容詞については，第 1 音節にストレスがあるという規則が示されている。

1.2.2. 接辞におけるアクセント

接辞についても基本アクセントと例外アクセントに大別できる。接辞のアクセントに関するこれまでの研究の概観を Sebüktekin（1984）が整理している。Sebüktekin（1984）では，接辞のアクセントの扱いに関して，Stress-marked analysis（SMA）と Boundary-marked analysis（BMA）の 2 種があるとしている。SMA については Lees（1961），Swift（1963）が，BMA については Foster（1969），Dobrovolsky（1976），Özkaragöz（1981）があげられている。筆者が知る限りでは，

がなされている語（形容詞と副詞が併記されている çocukça（こどもっぽい，こどもらしく）など）はここでは除外して数値を示している。

[7] Konrot（1987）では，一部反論がなされているが，2 ～ 3 音節語ではほぼ同様の結論に至っている。

[8] Sezer（1981: 62–63）では，派生接辞 -en によって形成される副詞の規則も示されているが，これは（6）に相当する規則である。ただし，-en の場合，strong NFS word だけでなく，weak NFS word にも適用できる点で（6）とは別規則となる。（4）～（6）の規則で処理できない反例として，重音節の音節末に共鳴音（l, m, n, r）がある場合（Ban-dír-ma ～ Bán-dır-ma（地名）というゆれや，kam-pá-na（ベル＜英語）など）が Sezer（1981: 67–68）で指摘されている。ただし，その規則性はまだ明らかではない。

Demircan（1975, 1976a, b）も基本は SMA である。近年の研究では，Inkelas and Orgun（1998），Inkelas（1999）による最適性理論の適用や，Kabak and Vogel（2001）による音韻的語や音韻的句などの言語単位ごとに規則を立てた研究があげられる。

SMA の考え方は，まず接辞をストレスを担いうる接辞（stressable suffix）とストレスを担わない接辞（unstressable suffix）に大別するところからはじまる。一例として，Demircan（1975: 334–335）による分類を例示する。（7）の分類では，2a）と 2b）ii が基本アクセントで 1 と 2b）i が例外アクセントになる。

（7）　接辞
　1. 全くストレスを担わないもの
　2. ストレスを担いうるもの
　　a）単音節
　　b）多音節
　　i. ストレスが末尾の音節にないもの
　　ii. ストレスが末尾の音節にあるもの

Inkelas（1999）では，中立接辞（neutral suffix）とストレスを担った接辞（stressed suffix）と前ストレス（＝直前の音節にストレスが置かれる）接辞（pre-stressing suffix）とに分類され，例外アクセントの説明には主にストレスを担った接辞と前ストレス接辞が用いられる。両者の分類の違いを表 1 に例示する。

表 1：Demircan（1975）と Inkelas（1999）での接辞の扱いの違い[9]

接辞	例	Demircan（1975）	Inkelas（1999）
-me^2　（否定）	gélmedi	1	pre-stressing
-di^4　（完了形）	geldí	2a）	neutral
-e^{2}re^{2}k（連用形）	gelérek	2b）i	stressed
-e^{2}ce^{2}k（未来形）	gelecék	2b）ii	neutral

最終音節すなわち最も右の音節にストレスが置かれるより前の位置にストレスを担わない接辞があれば，その直前の音節にストレスが置かれるというのが SMA の基本的な考え方である。語幹については基本アクセントであれば接辞によってストレスの位置が決まり，例外アクセントであれば語幹のストレスの位置が相対的に最も左側にあるのでその位置が優先される。以下に例示して説明する。

[9] トルコ語には母音調和があるため，直前の母音によって交替形がある。e^2 は e ～ a の交替形が，i^4 は i ～ ü ～ ı ～ u の交替形がある。e^2 は直前の母音が前舌母音群（e, i, ö, ü）なら e，後舌母音群（a, ı, o, u）なら a となる。i^4 は直前の母音が前舌非円唇母音群（e, i）なら i，前舌円唇母音群（ö, ü）なら ü, 後舌非円唇母音群（a, ı）なら ı, 後舌円唇母音群（o, u）なら u となる。

(8)　babá　父
　　babalár　父たち
　　babalardá　父たちのところで
　　babalardádır　父たちのところにいる
(9)　téyze　おば
　　téyzeler　おばたち
　　téyzelerde　おばたちのところで
　　téyzelerdedir　おばたちのところにいる

-le^{2}r（複数接辞），-de^{2}（位格接辞）はストレスを担いうる接辞，di^{4}r（繋辞）はストレスを担わない助動詞である。(8) の場合，ストレスを担いうる接辞のみが後続している場合には最終音節にストレスがあり，ストレスを担わない接辞がある場合にはその直前にストレスがある。(9) の場合，語幹が例外アクセントなので，そのストレスの位置が最優先される。ストレスを担わない接辞が 2 つ以上ある場合は，相対的に左側のストレスを担わない接辞の直前にストレスが置かれる。Inkelas (1999) では，(9) のような例を，ストレスが指定された語幹が入力され，そのまま出力されるというようにとらえており，これを Input Wins[10] としている。

(10)　gelmíş　来た
　　gélmemiş　来なかった
　　gelmíşse　来たなら
　　gélmemişse　来なかったなら

(10) の例において，-mi^{4}ş（完了接辞）はストレスを担いうる接辞，-me^{2}（否定接辞），-(y)se^{2}（条件接辞）はストレスを担わない接辞である。gelmemişse を見れば，2 つのストレスを担わない接辞がある場合，相対的に左側の -me^{2} の直前にストレスがあることが確認できる。

一方の BMA であるが，語幹の扱いについては SMA と同様である。Özkaragöz (1981) では，語境界 (#)，語境界よりは結びつきが弱い語形成境界 (+)，語形成よりは結びつきが強い第 3 の境界 (=) という 3 種の境界を立てた。第 3 の境界には，疑問接辞，否定接辞，繋辞人称接辞，副詞的接辞，後置詞などが属する。この境界を設けることで，以下の規則でストレスの位置が指定できるとしている。

(11)　$V \rightarrow [\ 1\ str\ ]\ /\ _\ \begin{Bmatrix} \# \\ = \end{Bmatrix}$

ただし，この規則だけでは以下の例の説明がつかないため，最も左にある第 3 の境界 (=) の直前にストレスが残るという削除規則が必要となる。

[10] Inkelas and Orgun (2003) では，Innermost Wins となっている。

（12）　sıra+lá=ma+míş=sıníz#
　　→sıra+lá=ma+mış=sınız#

Foster（1969）や Dobrovolsky（1976）では，= と # の区別はつけていないが削除規則によって，ストレスの正確な位置を指定する。BMA は，語あるいは形態素境界によってストレスの位置が指定され，削除規則を要するというところに，SMA との違いがある。

以上のように，トルコ語のアクセントは強さアクセントであって，基本アクセントは最終音節にストレスがあるということを前提とする研究が多数派を占める。そして，例外アクセントにおいて，ストレスがどのような音節構造で予測できるか，ストレスがどのように規則的な移動をするかを考察するのが，トルコ語のアクセント研究の主流である。

2. 強さアクセントか高さアクセントか

これまでの諸説ではトルコ語を強さアクセントとしてとらえている。しかし，筆者はトルコ語を強さアクセントとして解釈する点に疑義を抱いている。本節では，トルコ語を強さアクセントとして解釈する問題点を示していく。

2.1. 音声学的に弱母音があるのか

強さアクセントの特徴として, ストレスを伴わない母音が弱母音（曖昧母音, シュワー）になるという点があげられる。弱母音の特徴として，持続時間長が相対的に短い，母音が中舌化[11] や中央化によって曖昧な音色になるといった点がある。

上記の特徴を音響音声学的に解析した研究として，以下の研究がある。Beckman（1986）では，高さアクセントが基本周波数のみに特徴があるのに対し，強さアクセントは基本周波数，持続時間長，インテンシティが関わる点が指摘されている。Bolinger（1958）では, 強さアクセントである英語を音響解析した結果, 認知のキューとなるのは高さであると指摘されている。しかし，強さアクセントにおけるストレスは必ずしも高さのみに依存するわけではなく，モンゴル語のようにストレスのある音節と高くなる音節が一致しない言語がある。Fry（1955）では，英語においてストレスと持続時間長が強い相関を示すのに対し，インテンシティは相関がないことが指摘されている。福盛（2002）では，広母音に関して英語やモンゴル語のフォルマント周波数解析を行った結果，ストレスのない母音は F1-F2 の分布が相対的に中央化することが指摘されている[12]。以上の点をふまえて，トルコ語が強さアクセントか高さアクセントかを判別する際に，高さに関わる基本周波数以外の要因の

[11] 中舌化は弱母音になりうる可能性はあるが，中舌母音でも明瞭母音となる例としてモンゴル語ハルハ方言の [ɵ] やモンゴル語チャハル方言の [ə] などがあげられ，単純に中舌母音であることが弱母音の判断根拠とはならない。城生（1997）参照。
[12] 狭母音については，言語によっては必ずしも相対的に中央化するわけではない。

音響解析結果が役立つことが確認できる。

トルコ語におけるアクセントの影響による母音の音響音声学的研究として，Konrot（1981），福盛（1998, 2000a, 2000b, 2002, 2004），Levi（2005）があげられる。持続時間長については，Konrot（1981），福盛（2000a, 2000b, 2002, 2004），Levi（2005）のいずれにおいても若干の差は見られたものの，強さアクセントにおける長短差ではないため相関性はないという結論に至っている[13]。インテンシティについては，Konrot（1981），福盛（2000a, 2000b, 2002, 2004），Levi（2005）のいずれにおいても安定した傾向性が得られなかったため，アクセントとの相関性はないという結論に至っている。フォルマント周波数解析については，福盛（1998, 2004）において若干の違いは見られるものの，傾向性や再現性は得られなかった点から，アクセントとの積極的な相関性はないという結論に至っている。また，これらの音響音声学的研究で，第 1 音節について他の音節と比べてストレスとみなすための要因は析出されなかった。

以上の音響解析結果をふまえると，英語などの強さアクセントに見られる音響音声学的特徴はトルコ語においては観察されなかったということになる。よって，弱母音の有無という観点からはトルコ語は強さアクセントではないということができる。

2.2. 音韻論的に弱母音があるのか

ストレスがある母音とストレスがない母音（＝弱母音）との違いとして，ストレスがない母音の方が，ストレスがある母音より実現する音の数が少なくなるという点があげられる。例えば，ロシア語においてストレスのある母音が /i, e, a, o, u/ の 5 つであるのに対し，ストレスがない母音は /i, a, u/ の 3 つになり，数が減るという点である。イタリア語においてもストレスがある母音が /i, e, ɛ, a, ɔ, o, u/ の 7 つであり，ストレスがない母音は /i, e, a, o, u/ の 5 つになり，数が減っている。

この解釈をトルコ語に適用して，o および ö が第 2 音節以降に来ない[14] 点をとらえ，トルコ語にストレスがあると解釈する考え方が早田（2005: 17）によって示されている。しかし，o や ö が弱化によって u や ü になるといったようにアクセントの影響で母音が弱化して数が減少したのではなく，通時的な別の要因[15] でそうなったと

---

[13] 福盛（2002）では，持続時間長における若干の差を考慮し，強さアクセントと高さアクセントのそれぞれの特徴を部分的に有していると解釈し，トルコ語の音声学的アクセントに対し「つよさ」と「たかさ」の混淆語となる「つかさアクセント」と扱う考え方が提唱されている。本稿で扱うところの音声学的アクセントと音韻論的アクセントの違いは，福盛（2004）に示される抽象度の違いに基づいている。本稿では，実現する音声の付随的要因（トルコ語のアクセントでは持続時間長の相対差）を含めて抽象化したのが音声学的アクセントであり，体系を考慮して付随的要因を捨象したのが音韻論的アクセントとして扱っている。

[14] 固有語においてのことであり外来語ではその限りではない。例えば，istasyon（駅＜フランス語），futbol（サッカー＜英語）など。また，接辞では -i[4]yor（～している）があげられる。

[15] 筆者の知る限り，この要因を明らかにした見解はみられない。通時的にアクセントが影響したのかもしれないが，現時点ではその要因は不明である。

考えられる。したがって，現代トルコ語を共時的にとらえる限り，アクセントの影響で母音の数が減少したわけではないので，この観点から強さアクセントであるとはいえないことになる。

2.3. 下がり目の重要性

トルコ語のアクセントにおける高さに対して音響音声学的解析を行った研究にKonrot（1981），福盛（2004）があげられる。両研究では，高くなる音節とそれ以外の音節における基本周波数値の計測，およびその差についての結果が示され，高くなる音節の特徴を示している。しかし，例外アクセントにおいて高いところから低くなる下がり目について，ふみこんだ考察はなされていない。下がり目について音響音声学的にふみこんだ解釈を示した研究に，Levi（2005）があげられる。

Levi（2005）では，トルコ語のアクセントに対し音響音声学的解析を行った結果，高さアクセントの特徴を有し，アクセントにおいて音調の下がり目が重要であるという解釈が示されている。Levi（2005）では，名詞群と動詞群を分析資料としている。名詞群は名詞語幹単独および前アクセント（pre-accenting）となる共同格・具格の後置詞 -le^2 をつけたものとアクセントを担いうる（accentable）位格接辞 -de^2[16] をつけたものを，動詞群は動詞語幹にアクセントを担いうる動名詞接辞 -me^{2}k をつけたものと前アクセントとなる否定接辞 -me^2 および動名詞接辞 -me^{2}k をつけたものを Ahmet ‘ X ’ dedi.（アフメットは X と言った。）というキャリアセンテンスに対象となる語を埋め込んで調音させた文を対象に分析されている。分析資料には，名詞群では sinék（蝿），sinékle（蝿と）sinekté（蝿に）といった語が，動詞群では banmák（つけること），bánmamak（つけないこと）といった語が用いられている。分析方法としては，基本周波数，持続時間長，インテンシティを計測している。その結果，基本周波数が他の要因よりアクセントの位置を指定するのに重要な要因で，下がり目の直前の音節にアクセントが指定されるとしている。Levi（2005）は，これまでの多くの強さアクセント説に対し，積極的に高さアクセント説を主張しており，下がり目の重要性を指摘した点は重要であった。しかし，その下がり目によってトルコ語のアクセントの型がどのようになるかを示していない。この点をふまえて，高さアクセントの特徴を有しているのであれば，例えば日本語のような下がり目によるアクセント体系を検討する必要がある[17]。

そこで，本稿では，下がり目がトルコ語のアクセントを説明するにあたって有効

---

[16] 母音調和による交替形と子音の無声同化による交替形を含めると -de^2 は -de ～ -da ～ -te ～ -ta の 4 つの交替形が存在する。

[17] 査読者から，上がり目あるいは他の音節より高いことが重要な言語があり，これらの可能性を排除すべきと指摘された。上がり目については，例えば sinékle であれば，/「 le/ といったように音素実質のないところに変化点を認めることになり問題がある（上野（1977: 203）参照）。また，他の音節より高いというだけでは，イントネーションやプロミネンスなどによって高いということとの区別が必要になってくる。こういった点をふまえて，本稿では下がり目を重要な指針として，以下の分析を進めている。

な観点であることを指摘し，下がり目によるアクセント体系を例証することが主たる目的となる。

3. トルコ語のアクセント

3.1. 基本アクセントと例外アクセント

トルコ語のアクセントに対するこれまでの多くの考え方は，強さアクセントで語の最終音節にストレスがあるのが基本アクセント，最終音節以外の位置にストレスがあるのが例外アクセントというものであった。しかし，本稿で提唱するのは，トルコ語は音韻論的に高さアクセントで，音節境界に下がり目を指定するか否かが重要で，下がり目がないのが基本アクセント，下がり目があるのが例外アクセントという考え方である[18]。換言すれば，トルコ語のアクセントは日本語のように下がり目を有するか否かによって型が異なる高さアクセントであるということである。以下，基本アクセントに属する baba（父）と例外アクセントに属する teyze（おば）に基本アクセントに属する接辞をつけた例を示す[19]。

(13)　baba　父
　　LH
　　babanın　父の
　　LLH
　　babaların　父たちの
　　LLLH

(14)　teyze　おば
　　HL
　　teyzenin　おばの
　　HLL
　　teyzelerin　おばたちの
　　HLLL

この違いを下がり目（˥）の有無で説明すると以下のようになる。

(15)　baba　{σσ}[20]

---

[18] 分類における基本的な考え方は，Inkelas（1999）と共通する。中立形態素（neutral morpheme）はストレスの指定がない，非中立形態素（non-neutral morpheme）はストレスの指定があるという区分で，指定の有無に基づく点は筆者の区分と同様の着想である。また，Sezer（1981）で提唱された例外アクセントにおけるストレスの位置の予測については，ストレスを下がり目に置き換える，すなわち「後から 2 番目の音節にストレス」は「最終音節の直前に下がり目」，「後から 3 番目の音節にストレス」は「後から 2 番目の音節の直前に下がり目」，「第 1 音節にストレス」は「第 1 音節の直後に下がり目」とすることで，規則の大本は支持できる。

[19] 以降ではストレス説をとらないため，トルコ語のアクセント表記を L（低），H（高）の音調表記で示す。

[20] アクセントで支配されるひとまとまりをアクセント単位とし｛ ｝でくくって示す。

（16）　teyze　　{σ⌉σ}

基本アクセントには下がり目がなく，例外アクセントには下がり目があるということである。よって，例外アクセントの語幹に基本アクセントの接辞がついても基本アクセントは下がり目がないので，例外アクセントの下がり目以降そのまま音調は下降に従って自然下降になるということである。では，基本アクセントの最終音節の H は何であろうか？

基本アクセントも例外アクセントも高くなるところは 1 か所である。この点が強さアクセントによるストレスと捉えられてきた一因である。しかし，（13）に示した H と（14）に示した H は音声実現としては等質ではない。（13）のような基本アクセントに属する語は後に接辞を伴ってもあくまで最終音節が高くなるのだが，音節数の増加によって高くなる度合いが軽減されることが福盛（2004）における基本周波数の計測結果によって示されている。また，後述する例外アクセントに属する後置詞を名詞語幹につけたアクセントは以下のようになる。

（17）　baba　gibi　　父のように
　　LH　LL

（17）のように後置詞 gibi が後続する場合，基本アクセントの語の最終音節が高くなるという点では，単独での場合と一見変わりはない。しかし，福盛（2004）では，単独での場合の高くなる度合いと，後置詞が後続する場合の高くなる場合とでは，後者の方が高くなる度合いが大きくなることが示されている。この要因として，後置詞が直前に下がり目がある例外アクセントであるからと考えられる（3.4. 節参照）。この下がり目が音調の下降を要求するため，下降のためにその直前の音節をより高くする必要があるということである。この点を考慮すると，baba における LH と baba gibi における LH LL の H は等質であるとはみなせない。そこで，下がり目の指定がなければ語末が高くなるという音調指定[21] をトルコ語に導入すれば，基本アクセントの説明に役立つと考えられる。（13）にみられる最終音節が高くなるという現象はストレス指定によるものではなく，音調指定によるものであって，（14）にみられる現象は下がり目の指定によって直前が高くなるといったものである。これによって，音声学的に等質ではない H が区別できたことになる。

[21] この音調指定を近畿アクセントの低起上昇式に例えるか否かについては，査読者から慎重な検討を要するとの指摘を受けている。下がり目がなければ最終音節が高くなり，下がり目があれば最終音節は高くならないという特徴が観察されるが，この現象にはゆれがあり，例えば Ankara'da（アンカラで）の場合，HLLL も HLLH も観察される。また，onun gibi（そのような）の例では規則的には LHLL だが，LHLH のような例も観察される（福盛（2009）参照）。下がり目によって直前が高くなることと最終音節が高くなることは区別されるべきであるが，Ankara'da や onun gibi のように句末の上昇イントネーションが重畳していると解釈できる例もあるため，最終音節が高いことが語に対してのみ指定される音調指定であるかどうかについては，今後更なる検討が必要である。

3.2. 接辞における例外アクセント

基本アクセントに属する接辞が基本アクセントに属する名詞に後接する場合，(13) のように最終音節が高くなる。しかし，例外アクセントに属する接辞が後接する場合，以下のようになる。ここでは，基本アクセントに属する gel-（来る）という語幹に基本アクセントに属する -mi^{4}ş（～た，～ようだ），-le^{2}r（複数接辞）という接辞や例外アクセントに属する -(y)se^{2}（～なら）という接辞をつけた例を示す。

(18)　gelmiş　　来た
　　LH
　　gelmişse　　来たなら
　　LHL
　　gelmişseler　　彼らが来たなら
　　LHLL
　　gelmişlerse　　彼らが来たなら
　　LLHL　　(Demircan 1975: 335)

例外アクセントの接辞はその直前に下がり目がある例外アクセントであると解釈した場合，以下のようにまとめられる。

(19)　{ 語幹　˥例外アクセント接辞 }

接辞の直前に下がり目があることによって，その前の音節が高くなっているということである。よって，(18) の例はそれぞれ gelmiş {σσ}，gelmişse {σσ˥σ}，gelmişseler {σσ˥σσ} gelmişlerse {σσσ˥σ} ということになる。

例外アクセントに属する接辞は，その直前に下がり目があるのだが，-(y)se^{2} のようなタイプと異なるタイプがある。

(20)　Japon　　日本人
　　LH
　　Japonca[22]　　日本語
　　LHL
(21)　İngiliz　　イギリス人
　　HLL
　　İngilizce　　英語
　　LLHL

これらは人種をあらわす名詞に -çe^{2}（～語）という接辞を後接した場合の例である。(20) のように基本アクセントについた場合だけだと接辞の直前に下がり目が

[22] 母音調和による交替形に加えて，子音の有声同化による交替形もあるため，-çe^{2} は -çe ～ -ça ～ -ce ～ -ca の 4 つの交替形が存在する。

あるという点が（19）のような説明で事足りるように見えるが，（21）のように例外アクセントについた場合を見ると直前に下がり目があるという指定だけでは不十分であることが明らかである。この接辞は前接の例外アクセントによる下がり目より接辞の直前の下がり目を優先するアクセントとなっている。このタイプの接辞のアクセントは前部要素の下がり目を削除し，接辞の直前の下がり目に引き寄せるアクセントとなっているため，（19）とは異なる示し方が必要である。そこで，他より優先されるという点を考慮し，˥を 2 つ示しておく。

（22）｛語幹　˥˥例外アクセント接辞｝

以降，（19）のようなタイプを例外アクセント A，（22）のようなタイプを例外アクセント B として議論を進める。例外アクセント B はその下がり目が最優先となるのに対し，例外アクセント A は当該要素の直前にある下がり目以前に下がり目がある場合には前にある下がり目が優先される。この点については，以下の例から確認できる。

（23）gelmiş　来た
LH
gelmemiş　来なかった
HLL
gelmişse　来たなら
LHL
gelmemişse　来なかったなら
HLLL

（23）の例では，-me^2（否定接辞）は例外アクセント[23] に属するので，-(y)se^2 より前に下がり目があることになる。この場合，前にある -me^2 の下がり目が優先されて，結果 1 か所の下がり目だけが残ったということである[24]。

以上の考察から，ストレスを担いうる接辞とストレスを担わない接辞というように 2 種に大別する出発点は，トルコ語のアクセントをとらえるには不十分であることが分かる。ストレスを担いうる接辞というのはむしろ何も指定がない接辞という

[23] 例えば，reddet-（拒む），hallet-（解く），kaybol-（なくなる）といった複合動詞語幹のアクセント実現形は HL であるが，否定接辞が後続する時にはそれぞれ LHL になる。よって，否定接辞は例外アクセント B である。ただし，ゆれがあるため，話者によって例外アクセント A となる場合もある。これについては，プロミネンスが関与している可能性がある（Sebüktekin（1984）参照）が，詳細な分析は今後の課題である。複合動詞のアクセントは 3.3. 節に示す複合語の規則が適用される。

[24] 例外語幹と例外接辞の結びつきについては，例えば yalnız（ただ，単に）は HL であり，例外接辞となる -ce^2 をつけた yalnızca（単独で，1 人で）は HLL になる場合と LHL になる場合とのゆれがある（LLH という実現形もあるが，これは最終音節が高くなるという音調指定によってアクセントの下がり目が消失したと考えられるため，本稿では扱わない）。この場合，HLL の場合は例外アクセント A であり，LHL の場合は例外アクセント B である。このゆれについての詳細な分析は今後の課題である。

べきで，他の指定に従う属性を有しているということである。Inkelas（1999）では，中立接辞とストレスを担った接辞と前ストレス接辞の 3 つに分けられるが，ストレス指定の有無という観点から，無しが中立接辞であるという点は本稿に近い考え方である。ただし，アクセントの指定がストレスか下がり目かという大きな違いがある。

ストレスを担った接辞については，接辞における下がり目の位置が直前の音節境界にあるか，接辞内部の音節境界にあるかという違いで，分類の有効性は認められる。

（24）　gelmişse　　来たなら
　　LHL
　　gelerek　　来てから
　　LHL

-(y)se^{2} のアクセントが {˥σ} であるのに対し，-e^{4}re^{4}k のアクセントは {σ˥σ} であり，アクセントによる下がり目の指定の位置が異なると解釈できる。ただし，例外アクセント A と B の違いほど機能的に大きな違いがあるとはいいがたい。ストレスを担った接辞と前ストレス接辞という分類は例外アクセント A あるいは B の下位分類として検討する余地はあるが，本稿ではアクセント型の違いという扱いをする。

また，ストレスを担わない接辞は，接辞の直前の音節境界に下がり目を指定するという点で，前ストレス接辞という考え方が本稿に近い考え方である。ただし，音節境界に下がり目があり，その下がり目の質が 2 種に分けられるという点がこれまでの研究で示されなかった点である。

3.3. 複合語における例外アクセント

複合語のアクセントはこれまでの説では最終音節に来ない例外アクセントとして扱われ，例えば，Inkelas and Orgun（1998）や Kabak and Vogel（2001）では前部要素のストレスだけが残り，後部要素のストレスが消えるという Leftmost wins という説明がなされた。しかし，複合語についても下がり目の指定によって説明がつく。

（25）　baş ＋ bakan → başbakan　　頭＋大臣 → 総理大臣
　　H　LH　　HLL
（26）　kadın ＋ göbek → kadıngöbeği[25]　　女＋へそ → お菓子の名前
　　LH　LH　　LHLLL
（27）　Boğaziçi ＋ köprü → Boğaziçi köprüsü
　　ボスポラス海峡 ＋ 橋 → ボスポラス大橋
　　LHLL　　LH　　LHLLLLL

これらはストレス説であると後部要素のストレスが消えるという説明が有効であるように見える。一方，下がり目の指定であれば，複合語は後部要素の直前にある

[25] 複合語になることによって後部要素の göbek に限定接辞 -(s)i^{4} がついて göbeği という形になっている。以下複合語の例でも同様である。限定接辞という用語は竹内（1970）による。

下がり目以前に下がり目がある場合には前にある下がり目が優先される例外アクセントAとなる。後部要素の直前に下がり目があるという解釈については，以下の例からも確認していきたい。

(28)　Anadolu　+　kavak　→　Anadolukavağı
　　アナドル（地名）+　ポプラ　→　アナドルカバウ（地名）
　　LHLL　　LH　　LLLHLLL　　(Demircan 1996: 145)

(29)　Fenerbahçe　+　plaj　→　Fenerbahçe plajı
　　フェネルバフチェ（地名）+　海水浴場　→　フェネルバフチェ海水浴場
　　LHLL　　H　　LLLHLL (Demircan 1996: 145)

(30)　Fevzi Paşa　+　bulvar　→　Fevzipaşa Bulvarı
　　フェブジ 将軍　+　並木通り　→　フェブジ将軍通り
　　LH LL　　LH　　LLLH LLL　　(Demircan 1996: 145)

Leftmost winsという説明では，前部要素が例外アクセントである複合語のアクセントの説明としては不十分である。(25)～(27)の例では問題がないが，(28)～(30)のように，ストレスの位置が一番左というわけでも左項のストレスがそのまま残るというわけでもなく，後部要素の直前に下がり目がある例外アクセントBによる例が観察できるからである。(29)では，Fenerbahçeはfener（提灯，LH）とbahçe（庭，LH）の複合語でLHLLとなっており，さらにplajと結びついた複合語となっている。Fenerbahçe plajıにおける前部要素はFenerbahçeであるが，この場合にLLLHLLという実現形があることがDemircan（1996）によって指摘されている。この例では，Leftmost winsという説明があてはまらなくなり，これまでの説では複合語のアクセントの説明が不十分であったことが確認できる。ただし，(29)の例ではLHLLLLという実現形もあり，ゆれが観察される。これらの点を考慮した上で，複合語においてアクセントの指定をするのは後部要素を基準とした音節境界であるとすれば，他の現象と一貫した形で説明できる。複合語のアクセントについては，ゆれをふまえて(31)のようにまとめられる[26]。

(31)　{前部要素　ㄱ後部要素}～{前部要素　ㄱㄱ後部要素}

3.4. 後置詞を伴う例外アクセント

トルコ語には，名詞に後接して句を作る付属語に後置詞がある。gibi（～のような，のように），kadar（～くらい，～まで），için（～のため）などの語が後置詞に相当

[26] このゆれに関して，(25)～(26)および(28)～(30)における例外アクセントBを複合語アクセントの基本として，(27)における例外アクセントAを複合語アクセントの例外とみなすのか，(25)～(27)における例外アクセントAを複合語アクセントの基本として，(28)～(30)における例外アクセントBを複合語アクセントの例外とみなすのかについては，話者の脳内でどちらを優位な規則とみなしているかに依拠すると考えられる。査読者からは例外アクセントAの複合語が少なからず観察されるという事実を指摘されている。この点は，今後の計量的研究の進展を待ちたい。

する[27]。これらの語の音声・音韻における特徴として，母音調和に従わない，語の最終音節が高くならない（無アクセント）といったことが指摘されてきた。語の最終音節が高くならないという点では，例外アクセントに属する。しかし，本稿では，語の最終音節が高くならないという観点からではなく，下がり目を有するという観点から例外アクセントとして扱う。

名詞（および名詞相当語句）の後に後置詞を伴って句を作る場合，名詞＋後置詞でアクセント単位をなす。それは，後置詞がその直前に下がり目がある例外アクセントであり，前項の名詞に対し影響を及ぼすからである。前項の名詞と後置詞とで形成されるアクセント単位での下がり目は例外アクセント A となる。用例は（32）～（37）に示す。

（32）　baba gibi　　父のような
　　LH LL
（33）　istediğiniz gibi　　ご希望どおりの（iste-diğ-iniz 望む - 連体形 - あなたが）
　　LLLLH　LL
（34）　ne kadar　　どのくらい
　　H LL
（35）　odanıza kadar　　あなたの部屋まで（oda-nız-a 部屋 - あなたの - へ）
　　LLLH　LL
（36）　onun için　　そのために
　　LH　LL
（37）　yemek için　　食事のために
　　LH　LL

前項に例外アクセントが来る場合には，前項の下がり目が優先され，後置詞は前項からの下降にそのまま従ったアクセントになる。（38）に例外アクセントの単純語を伴う例，（39）に例外アクセントの複合語を伴う例を示す。

（38）　teyze gibi　　おばのように
　　HL　LL
（39）　akşam yemeği için　　夕食のために
　　LH　LLL　LL

以上の例から，後置詞はその直前に下がり目を有するアクセントであることと，前項に下がり目がある場合はそちらの下がり目が優先されることが確認できた。よって，後置詞のアクセントは以下のようにまとめられる[28]。

---

[27] ile（～と，～といっしょに，～で）は単独形では母音調和に従わないが，前項に続く接続形では -yle ～ -yla のように母音調和に従う形となる。アクセントに関しては，他の後置詞と同様である。
[28] 後置詞の下がり目に関する規則は，福盛（2009）が初出である。

（40）｛前項　ㄱ後置詞｝

3.5. 小辞を伴う例外アクセント

トルコ語には，母音調和には従うものの正書法では切りはなして書かれる小辞と呼ばれるものがあり，de^{2}（～も），mi^{4}（～か）がこれに属する。これらの小辞のアクセントは，一見すれば後置詞と同様にその直前に下がり目を持つ例外アクセントである。基本アクセントとなる名詞語幹に基本アクセントとなる接辞をつけた（41）と例外アクセントとなる小辞をつけた（42）を以下に示す。

（41）babada　　お父さんのところで
　　LLH
（42）baba da　　お父さんも
　　LH　L

前項に例外アクセントが来る場合，後置詞とは異なり，小辞の直前の下がり目が優先される[29]。

（43）Ankara　　アンカラ（トルコの首都，地名）
　　HLL
　　Ankara'da[30]　　アンカラで
　　HLLL
　　Ankara da　　アンカラも
　　LLH　L
（44）İstanbul　　イスタンブル（トルコの都市，地名）
　　LHL
　　İstanbul'da　　イスタンブルで
　　LHLL
　　İstanbul da　　イスタンブルも
　　LLH　L

小辞については，一見後置詞と同様にその直前に下がり目がある例外アクセントであるようにみえるが，詳細に観察すると後置詞とは異なり前項の下がり目より小辞の直前の下がり目を優先するアクセントとなっているため，例外アクセントBということになる。小辞のアクセントは以下のようにまとめられる[31]。

---

[29] ただし，ゆれが観察される。小辞の直前の下がり目が優先されるのが多数であるが，時に後置詞同様前項の下がり目が優先される場合もある。ゆれを含めた基本周波数曲線は，福盛（2008）によって示されている。
[30] 固有名詞の後に接辞が続く場合，正書法の表記では ' を挿入する。
[31] mi^{4} については，フォーカスによるイントネーションによって，この下がり目が実現しない場合があることが Kawaguchi et al.（2006），佐藤（2008）によって示されている。イントネーションによるアクセントの消失の詳細については今後の課題である。

（45）｛前項　ㄱㄱ小辞｝

3.6. 強調形における例外アクセント

トルコ語において形容詞を強調し「とても，大変」の意味を付加する造語法として，形容詞の第 1 音節の前に第 1 音節の CV とその後に何らかの子音[32] を挿入させた形を接頭辞的につける語がある。例えば, kara（黒い）, mavi（青い）が kapkara（真っ黒な），masmavi（真っ青な）といったようになる。この強調形のアクセントも例外アクセントに属する。

（46）kara　　黒い
　　LH
　　kapkara　　真っ黒な
　　HLL
（47）mavi　　青い
　　LH
　　masmavi　　真っ青な
　　HLL

（46）～（47）の例を見ると，一見複合語と同じように見えるが，以下の例を見るとそうではないことが確認できる。

（48）sağlam　　丈夫な
　　LH
　　sapasağlam　　とても丈夫な
　　HLLL
（49）karışık　　混乱した
　　LLH
　　karmakarışık[33]　大混乱した
　　HLLLL

（46）～（49）の例において一貫しているのは第 1 音節の後に下がり目があるということである。これは，例外アクセント A にも B にも該当しない。この事実を説明するために，上野（2002: 176）におけるアクセントにおける「意味カテゴリー表示機能」を適用する必要がある。意味カテゴリー表示機能とは，同じ意味カテゴリーに属する語が同じアクセント型になりやすい傾向があるという機能である。例えば,「東，南，西，北」は方向を示す名詞であれば平板型であるが，人の名字

[32] 一部の例で CV が挿入される場合もあるが，数は希少である。
[33] karmakarışık は強調形というよりは karma（混合の，LH）と karışık（混乱した，LLH）の複合語とも考えられる。造語法は異なるものの，強調形と同じアクセントになるということで，この項でとりあげる。

を示す名詞であれば頭高型になる。これは，それぞれの意味カテゴリーに属するということによって，アクセントが同じ型になろうとする傾向があるということである[34]。

意味カテゴリー表示機能が適用される他の例として，名詞あるいは形容詞が同形で副詞として使われる場合がある。以下，Demircan（1996: 143）の例を参照する。

(50)　akşam　　夜（名詞）
　　LH
　　akşam　　夜に（副詞）
　　HL
(51)　öyle　　そんな（形容詞）
　　LH
　　öyle　　そんなに（副詞）
　　HL
(52)　şüphesiz　　疑いのない（形容詞）
　　LLH
　　şüphesiz　　疑いなく（副詞）
　　HLL

全ての副詞がいわゆる頭高型になるわけではないが，同音異義語で副詞となる場合に意味カテゴリー表示機能によっていわゆる頭高型になる場合がある[35]。これと同様のアクセント規則が強調形にも働いているといえる。強調形においては音節数に関わらず，第 1 音節の直後に下がり目があるということである。よって，強調形のアクセントは以下のようにまとめられる

(53)　{σ˥σ…}

強調形が第 1 音節の直後に下がり目があるという点について，Sezer（1981）において第 1 音節にストレスがあるというほぼ同様の見解が示されているが，強さアクセントにおけるストレスの位置としてとらえるか，高さアクセントにおける下がり目の位置としてとらえるかに本稿における見解との相違がある。

4. 結語

以上の考察をまとめると以下のようになる。

---

[34] 意味カテゴリー表示機能は，同じ意味カテゴリーに属すれば必ず同じ型になるというものではなく，同じ型になりやすいという傾向性にとどまる。

[35] もともと形容詞である語が副詞として用いられる場合，必ずしもいわゆる頭高型にはならず，もとのアクセントを保つことが多く，もともと副詞である語は，いわゆる頭高型が多いということを査読者から指摘された。この点では，同音異義語で一方が副詞となる場合における意味カテゴリー表示機能は過渡期の段階であるといえる。

(54)　トルコ語は音韻論的には強さアクセントではなく高さアクセントである。
(55)　トルコ語のアクセントは，音節境界に下がり目を指定するか否かで実現形が決まる。
(56)　語幹・後続要素（接辞，小辞，後置詞など）のいずれにおいても，下がり目がないのが基本アクセント，下がり目があるのが例外アクセントである。
(57)　基本アクセントにおいて最終音節が高くなる現象は音調指定によるもので，アクセント指定による下がり目の影響で直前の音節が高くなる現象とは区別される。
(58)　例外アクセントには主に 2 種のタイプがある。例外アクセント A はその前に下がり目があればその前の下がり目を優先するタイプで，例外アクセント B はその下がり目が最優先されるタイプである。
(59)　例外アクセントには，意味カテゴリー表示機能によって，初頭音節の直後に下がり目があるタイプもある。

これまでのアクセント研究におけるストレスの位置の指定に関する規則の全てを否定したわけではなく，適用できる部分も多いと考えている。ただ，根本的な前提として，基本アクセントの最終音節におけるストレスと例外アクセントにおける最終音節以外に実現するストレスを音声学的に等質にとらえることに問題があるというところを出発点としたことがこれまでの研究と大きく異なる点である。この出発点に基づいた結果，高さアクセントで説明がつくということを示したのが本稿である。

今後の課題としては，この枠組みに基づいた例外アクセントに相当する後部要素（接辞，小辞，後置詞など）のリストを精密化させるところにある。トルコ語の例外アクセントについてはゆれが多くみられるため，まだまだ多くの記述が必要であり，それを基にしたリストの作成は今後の重要課題となる。また，筆者が知る限り，母音の弱化や脱落などがトルコ語に比べて頻繁にみられるトルクメン語においても，同様の分析を適用できるのではないかと考えている。トルコ諸語のアクセント体系において，母音の韻質を音声学的に的確にとらえた上で，アクセント体系の全体像を見渡せば，本研究の解釈がトルコ語だけに適用されるものではないことが明らかになるだろう。

参　照　文　献

Appenzeller, Heinz (1948) *Türkische Konzentrationsgrammatik, auf Grund neuartiger Systematik, Terminologie und Sprachphilosophie zum Selbststudium und zu Repetitionszwecken besonders geeignete Methode*. Zürich: Verf.

Beckman, Mary E. (1986) *Stress and non-stress accent*. Dordrecht: Foris.

Benzing, Johannes (1941) Noch einmal die Frage der Betonung im Türkischen. *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft*. 95: 300–304.

Bolinger, Dwight Le Merton (1958) A theory of pitch accent in English. *Word* 14(2-3): 109–149.

Csató, Éva Á and Lars Johanson (1998) Turkish. In Lars Johanson and Éva Á Csató (eds.) *The Turkic*

Languages, 203–235. London and New York: Routledge.
Collinder, Björn (1939) *Reichstürkische Lautstudien*. Uppsala: A.-B. Lundequistska, Leipzig: Otto Harrassowitz.
Demircan, Ömer (1975) Türk dilinde vurgusu: Sözcük vurgusu. *Türk Dili* 284: 333–339.
Demircan, Ömer (1976a) Türk dilinde ek vurgusu. *Türk Dili* 294: 196–200.
Demircan, Ömer (1976b) Türkiye yer adlarında vurgu. *Türk Dili* 300: 402–411.
Demircan, Ömer (1980) Yabancı dil öğretimi açısından İnglizce'nin vurgulama düzeni. Unpublished doctoral dissertation, İstanbul University.
Demircan, Ömer (1996) *Türkçenin Sesdizimi.* İstanbul: Der Yayınevi.
Dobrovolsky, Michael (1976) Is Turkish an agglutinative language? *Montreal Working Papers in Linguistics/Proceedings of NELS* 6: 87–101.
Foster, Joseph F. (1969) On some phonological rules of Turkish. Unpublished doctoral dissertation, University of Illinois.
Fry, Dennis B. (1955) Duration and intensity as physical correlates of linguistic stress. *The Journal of the Acoustical Society of America* 27(4): 765–768.
福盛貴弘（1998）「トルコ語におけるストレスと母音の音響特性との相関性」『言語学論叢』17: 13–50.
福盛貴弘（2000a）「トルコ語のストレスにおける音響音声学的特徴―インテンシティと持続時間長について―」『岡山大学言語学論叢』8: 19–32.
福盛貴弘（2000b）「トルコ語における語アクセントの音響音声学的特徴―ストレスに伴う持続時間長について―」『オリエント』43(2): 84–98.
福盛貴弘（2002）「つかさアクセント考」『認知科学研究』1: 21–40.
福盛貴弘（2004）『トルコ語の母音調和に関する実験言語学的研究』東京：勉誠出版.
福盛貴弘（2007）『トルコ語@ DVD 音声学』言語教育フォーラム 12. 東京：大東文化大学語学教育研究所.
福盛貴弘（2008）「トルコ語における小辞 de[2] のアクセント」寺村政男・久保智之・福盛貴弘（編）『言語の研究―ユーラシア諸言語からの視座―』語学教育フォーラム 16: 193–208. 東京：大東文化大学語学教育研究所.
福盛貴弘（2009）「トルコ語の後置詞アクセント小考：後置詞 gibi における音響音声学的パイロットスタディ」『言語学論叢特別号　城生佰太郎教授退職記念論文集』61–73.
Grønbech, Kaare (1940) Der Akzent im Türkischen und Mongolischen. *Zeitschrift der Deutschen morgenländischen Gesellschaft* 94: 374–390.
服部四郎（1973）「アクセント素とは何か？　そしてその弁別的特徴とは？」『言語の科学』4: 1–61.
林　徹（1989）「トルコ語」亀井孝・河野六郎・千野栄一（編著）『言語学大辞典　世界言語編（中）』2: 1383–1395. 東京：三省堂.
早田輝洋（2005）「諸言語の音韻と日本語の音韻」早田輝洋（編）『世界の中の日本語』朝倉日本語講座 1: 1-22. 東京：朝倉書店.
Horten, Max (1916) *Kleine Türkische Sprachlehre*. Heidelberg: Groos.
Inkelas, Sharon (1999) Exceptional stress-attracting suffixes in Turkish: representations versus the grammar. In: René Kager, Harry van der Hulst and Wim Zonneveld (eds.) *The prosody-morphology interface*, 134–187. Cambridge: Cambridge University Press.
Inkelas, Sharon and Cemil Orhan Orgun (1998) Level (non)ordering in recursive morphology: evidence from Turkish. In: Steven G. Lapointe, Diane K. Brentari and Patrick. M. Farrell (eds.) *Morphology and its relation to phonology and syntax*, 360–392. Stanford: CSLI.
Inkelas, Sharon and Cemil Orhan Orgun (2003) Turkish stress: a review. *Phonology* 20(1): 139–161.
Jansky, Herbert (1954) *Lehrbuch der türkischen Sprache.* Leipzig: Wiesbaden.
Johanson, Lars and Éva Á Csató (eds.) (1998) *The Turkic Languages*. London and New York: Routledge.
城生佰太郎（1997）『実験音声学研究』東京：勉誠社.
Kabak, Barış and Irene Vogel (2001) The phonological word and stress assignment in Turkish. *Phonology* 18(3): 315–360.
Kawaguchi, Yuji, Selim Yılmaz and Arsun Uras Yılmaz (2006) Intonation Patterns of Turkish Interrogatives. In: Kawaguchi, Yuji, Ivan Fonágy and Tsunekazu Moriguchi (eds.) *Prosody and*

Syntax Cross-linguistic Perspectives, 349–368. Amsterdam, Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

Kononov, Andrej N. (1956) *Grammatika sovremennogo tureckogo literaturnogo jazyka*. Moscow-Leningrad: Akademija Nauk SSSR.

Konrot, Ahmet (1981) Towards understanding Turkish stress: an acoustic and perceptual study. Unpublished doctoral dissertation, University of Essex.

Konrot, Ahmet (1987) Stress in Turkish. Is it determined phonologically or morphologically? In: Boeschoten, Hedrik E. and Ludo T. Verhoeven (eds.) *Studies on modern Turkish: Proceedings of the Third Conference on Turkish Linguistics*, 3–12. Tilburg: Tilburg University Press.

Konrot, Ahmet (1991) Sesbilgisi çalışmalarında nesnellik. *Dilbilim ve Türkçe,* 23–35. Ankara: Kurtuluş Basımevi.

Kornfilt, Jaklin (1997) *Turkish*. London and New York: Routledge.

Krámský, Jiri (1990) Phonetics and phonology. In: Hazai, György (ed.) *Handbuch der Türkischen Sprachwissenschaft*, 302–334. Budapest: Akadémiai Kiadó.

Kreider, Hermann H. (1954) *Essentials of modern Turkish*. Washington: The Middle East Institute.

Kúnos, Ignácz (1905) *Oszmán-török nyelvkönyv* [Osman-Turkish Languagebook]. Budapest: A Keleti Kereskedelmi Akadémia Kiadása.

Lees, Robert (1961) *The phonology of modern Turkish*. Washington: The Middle East Institute.

Levi, Susannah V. (2005) Acoustic correlates of lexical accent in Turkish. *Journal of the International Phonetic Association* 35(1): 73–97.

Lewis, Geoffrey L. (1953) *Teach Yourself Turkish*. London: Teach Yourself Books.

Lewis, Geoffrey L. (1967) *Turkish Grammar*. Oxford, New York: Oxford University Press.

Özkaragöz, İnci (1981) A boundary analysis of the exceptions to the final-stress rule in Turkish. *Linguistics Notes from La Jolla* 8: 89–112.

Radloff, Wilhelm (1882) *Phonetik der nördlichen Türksprachen*. Leipzig: T.O. Weigel.

Raquette, Gustaf (1927) *The Accent Problem in Turkish.* Lund-Leipzig: Gleerup Harrassowitz.

佐藤久美子（2008）「トルコ語の yes/no 疑問文におけるピッチ付与規則」寺村政男・久保智之・福盛貴弘（編）『言語の研究―ユーラシア諸言語からの視座―』語学教育フォーラム 16: 209–221. 東京：大東文化大学語学教育研究所.

Sebüktekin, Hikmet (1984) Turkish word stress: Some observations. In: Aksu-Koç, Ayhan and Eser Erguvanlı-Taylan (eds.) *Türk Dilibilimi Konferans; bildirileri 9–10 Ağustos 1984*, 295–307. İstanbul: Boğaziçi University Press.

Sezer, Engin (1981) On non-final stress in Turkish. *Journal of Turkish studies* 5: 61–69.

柴田武（1948）「トルコ語の文節とその構造」『日本学士院紀要』6(2-3): 163–186.

Swift, Lloyd Balderston (1963) *A Reference Grammar of Modern Turkish*. (Uralic and Altaic Series. 19.) Bloomington: Indiana University, The Hague: Mouton.

竹内和夫（1970）『トルコ語文法入門』東京：大学書林.

竹内和夫（1996）『トルコ語辞典：改訂増補版』東京：大学書林.

TDK (1988) *Türkçe Sözlük*. 8. baskı. Ankara: Türk Dil Kurumu.

TDK (2005) *Türkçe Sözlük*. 10. baskı. Ankara: Türk Dil Kurumu.

Underhill, Robert (1976) *Turkish grammar*. Cambridge, MA: MIT Press.

Underhill, Robert (1986) Turkish. In: Slobin, Dan Isaac and Karl Zimmer (eds.) *Studies in Turkish Linguistics*, 7–21. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.

上野善道（1977）「日本語のアクセント」大野晋・柴田武（編）『音韻』岩波講座日本語 5: 281–321. 東京：岩波書店.

上野善道（2002）「アクセント記述の方法」飛田良文・佐藤武義（編）『発音』現代日本語講座 3: 163–186. 東京：明治書院.

Zimmer, Karl E. (1970) Some observations on non-final stress in Turkish. *Journal of the American Oriental Society* 90(1): 160–162.

執筆者連絡先：
175-8571 東京都板橋区高島平 1-9-1
大東文化大学外国語学部日本語学科
ICG01649@nifty.com

［受領日　2009 年 5 月 15 日
最終原稿受理日　2009 年 12 月 25 日］

Abstract

On the Accent in Turkish

Takahiro Fukumori
Daito Bunka University

Turkish has been said to have stress accent. A frequent topic of discussion is which syllable stress falls on in the case of exceptional accent patterns, i.e., when the final syllable is not stressed. This study proposes that Turkish should be categorized as having pitch accent rather than stress accent. It is proposed that there are two kinds of accent in Turkish, basic and exceptional. In basic accent a fall in pitch is not observed, while in exceptional accent the pitch falls. Exceptional accent can be further classified into two main types. In exceptional accent pattern A, the existence of a preceding fall takes precedence in accent realization, whereas in exceptional accent pattern B, the pitch always falls regardless of whether there is another fall preceding it. Furthermore, an additional subtype of exceptional accent is proposed in which the pitch falls on the syllable just after the initial syllable depending on the representational function of the semantic category.